

*Raffiné Journal vol.05*

涙と泪

Raffiné

涙と泪は、同じ水ではない。

一方は感情の形で、  
もう一方は理由の前に滲む湿度。

幼い頃から感じるその違いを、  
言葉より先に、  
胸の奥で知っていた。

涙には名前がある。

悲しい涙、嬉しい涙、悔しい涙。  
誰もが知っている、  
理由のついた水。

けれど、私の中にはもうひとつ、  
理由の前にふっと溢れる水があった。

心がほんのわずかに揺れたとき、  
説明できない湿度が  
胸の奥から静かに上がってくる。

その瞬間に落ちるのは、涙ではなく「泪」。

その泪を流すたびに思う。  
「あ、またこの感覚」——

名前のない揺れだけが、  
ただ確かにそこにあった。

涙は、世界とぶつかったときに落ちる。

痛かったとき、悔しかったとき、  
人の言葉に傷ついたとき。

涙はいつも、  
目に見える“理由”を連れてくる。

流したあとで  
「こういう気持ちだったんだ」と  
自分を理解できるような、  
そんな水。

泪は違う。

たとえば夕方のにおいにふれたとき、  
窓の外の静けさが胸に触れたとき、  
言葉にならない揺れが  
心の奥からふわっと浮かび上がる。

その瞬間に落ちる水には、  
まだ名前がない。

それが流れるたびに、  
幼い自分に戻っていた。

大人になると感情には  
説明や言葉がつくようになる。

でも、涙だけは  
どの言葉にも分類できない。

理由も物語も持たずにただ滲む。

むしろ、年齢を重ねるほど  
その瞬間は鮮明になっていく。

涙が落ちるとき、  
心はいつも“奥のほう”で静かに揺れている。

涙は、  
世界に触れた心が  
表面にあふれたもの。

涙は、  
世界に触れる前の  
心の震えそのもの。

涙は“何があったか”を教えてくれる。  
涙は“何が揺れたか”を知らせてくれる。

涙が落ちるとき、  
理由ではなく“揺れ”で世界を感じている。

その揺れを手放さないかぎり、  
自分の奥の静けさを  
見失わずにいられる。



泪は、  
名前のつかない揺れを  
ただ静かに照らしてくれる——



Raffiné Journal — vol.05

著者：美学思想家 古川玲奈

発行：Raffiné

2026